

希望のあかりプロジェクト 2011-2016

KIBOU-NO-AKARI Project 2011-2016

聞間理・榊泰輔・青木幹太

九州産業大学

概要: 本稿では九州産業大学が行ってきた「希望のあかりプロジェクト」の活動を振り返る。6年にわたる活動を通じて、私たちは実に多くのことを得ることができた。陸前高田市の人々との交流関係ができたこと、震災について多くのことを教えていただけたこと、そしてその結果として参加学生たちの成長が見られたことである。同時に、これら活動によって積み上げて来た資産を今後どれだけ活用できるかどうか、この6年間の活動の価値を高めもすれば低くもすることを認識しなければならない。

abstract: In this article, we are reporting the activities that have provided the healings to people affected by the Great East Japan Earthquake. We have got relationships with Rikuzentakata citizens, valuable knowledge from quake survivors' experiences, and the growth of participant's skill and mind. Concurrently, we must realize that the value of our activities mostly depends on our future activities.

1. 希望のあかりプロジェクトのはじまり

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、東北地方沿岸部を中心に広域に渡って多くの方が被災され、あるいは亡くなられた。想像を超えた凄惨な映像や報道に衝撃を受けて「われわれに何かできることはないのか」と思いながらも具体的に動くプランがまとまらないまま2ヶ月が経った頃、青森県出身のランタンアーティストである三上真輝氏から大学に「一緒に何かできないか」と声かけがあった。このことが契機となり、九州産業大学芸術学部と工学部の教員及び学生からプロジェクトチームが組織され、九州から被災地に「希望のあかり」を届けようとのコンセプトのもとで活動が始まった。活動先としては、三上氏の知人筋を通じて陸前高田市のSAVE TAKATAにつながることでできたことが大きかった。こうした現地の中間支援組織の存在が、遠隔地から支援をしようとする者にとっては大変貴重であったことを重ねて強調しておくとともに、改めてここに感謝の意を表したい。

2. 希望のあかりプロジェクトのあゆみ

2011年から始めた「希望のあかり」を届ける活動は、表1のように展開していった。本プロジェクトは、これまで6年間に渡り活動を続けて来ており、プロジェクトとしての陸前高田市への訪問回数は12回となり(2016年12月まで)、訪問人数は延べ人数で120名を超える。予算の制約上、現地に来ることのできない学生や、様々な形でプロジェクト活動を支援してくれた方々まで含めると少なくとも200名以上の人々で作ってきたプロジェクトであるといえる。

これらの活動を分類すると(1)被災者への支援をする活動と(2)九州の人々の声を届ける活動(3)被災地に目を向けさせる活動からなっている(表1)。活動内容については毎年見直してきたが、その基盤には「九州産業大学にしかできないことをする」ということがある。本プロジェクトの構成メンバーには、芸術学部と工学部と経営学部の学生が多く、彼らがそれぞれ自分たちの持てる知識やスキルを活かすような活動を心がけて来た。また、九州という離れた地から訪れるということの持つ意味も考えるようにしている。非常に単純であるが、現地で他の人と話すときには「九州から来た」ことから話に入るようにしたり、現地でのワークショップの内容に九州の文化を感じさせることを絡ませるよう心がけている。さらに、大学生という立場を活かすことも大事だと日々考えている。大学生のような年齢の若者は、保育園にいけば思いっきり甘えさせてくれる若々しいお父さん・お母さんのような存在となり、高齢者福祉施設にいけば凛々しく可愛い孫となる。

常に変わらない部分もある一方で、活動の進め方においては経年的な変化を見てとることもできる。震災発生直後の2011年度から2013年度ぐらいまでは、ねぶたによる「あかり」および九州からのメッセージを届けることで陸前高田市の「元気」を与えたい、という気持ちを最優先に活動が展開されていたといえよう。その後、2014年度ぐらいから、被災地についての報道を九州ではなかなか得ることが難しくなってきたこと、また、参加学生たちが代替わりするにつれ、震災時の状況や現在までの経緯についての知識を十分に持たない者が増えてきたことなどが活動内容の策定において、不安要因として浮上してきた。そのため、事前もしくは訪問時に震災について知る機会を設けるほか、活動ニーズ調査として企業や団体の訪問を行って情報のネットワークを広げると共に、それぞれの思いを聞きだすことに力を入れるようになった。こうして、保育園や高齢者福祉施設への訪問を通じた人々との交流活動は継続しつつ、福岡での陸前高田市の物産の紹介と販売活動、「りんご」ねぶたの贈呈や害鳥駆除対策の提案など、より具体的な産業支援へとつながる活動などへと活動の幅を広げながら、今日に至っている。

表 1 希望のあかりプロジェクトの活動

時期	被災者への支援をする活動	九州の人々の声援を届ける活動	被災地に目を向けてもらう活動
2011年度	さるかに合戦をベースとしたねぶた劇および創作ワークショップ（「クリスマスツリー」ねぶたづくり）の実施。主な実施場所：保育園・高齢者福祉施設。（12月）		福岡市内の大型商業施設でのねぶた展示および、ねぶた劇の披露。（12月） 福岡市内で「プロジェクト展」での活動紹介展示。（3月）
2012年度	サン・ディグジュペリ「星の王子様」をベースに九州の民話を加えたオリジナル影絵劇および創作ワークショップ（「クリスマスツリー」ねぶたづくり）、プラネタリウム企画の実施。「雪だるま」「惑星」ねぶたの展示。主な実施場所：保育園・高齢者福祉施設・仮設住宅。（12月）	大学内および福岡市内の大型商業施設・広場での応援メッセージの収集活動と陸前高田市の訪問先での紹介と寄贈。（12月）	「ボランティア報告会-九産大は震災を忘れない」にて活動報告。戸羽市長による講演。（4月） 福岡市内の大型商業施設・広場でのねぶた展示および影絵劇の披露。（12月） 福岡市内で「プロジェクト展」での活動紹介展示と報告冊子の作成。（3月）
2013年度	「りんご」ねぶたを仮設住宅の住民の方と作るワークショップおよび夏祭りでの活用を支援。主な活動場所：仮設住宅。（8月） 創作ワークショップ（ひみつきち作り・未来のまちづくり・ランプ型ねぶたづくり）の実施および「クリスマスツリー」「松ぼっくり」ねぶた展示。主な実施場所：保育園・高齢者福祉施設・仮設住宅・学童クラブ。（12月）	大学内および福岡市内の大型商業施設・広場での応援メッセージを収集し、それを映像化して陸前高田市の訪問先での紹介と寄贈。（12月）	福岡市内の大型商業施設・広場でのねぶた展示および活動内容の紹介。（12月） 福岡市内で「プロジェクト展」での活動紹介展示。（3月）
2014年度	創作ワークショップ（博多人形への絵付け・竹とんぼづくり）の実施および「山笠・恵比寿」ねぶたの展示。主な実施場所：保育園・高齢者福祉施設・仮設住宅・学童クラブ。（12月） 今後の活動に向けての陸前高田市の産業や商業等についての現地調査。（3月）	福岡の人々に音楽に合わせて手を叩く応援映像に出演してもらい（11月）、完成した映像を現地の人々に見てもらった。（3月）	震災シンポジウム「震災を学ぶ・被災地支援を考える in 九州産業大学」にて活動報告。（5月） 大学近隣の自治体の催事において活動報告の展示。（7月） 陸前高田市の復興状況を取材し（8月）映像化したのちの大学祭で一般向けビデオ展示。（11月） 福岡市内で「プロジェクト展」での活動紹介展示。（3月）
2015年度	陸前高田市の産業や商業の課題についての現地調査。（8月） 創作ワークショップ（紙飛行機づくり・クリスマスリース）の実施。主な実施場所：保育園・高齢者福祉施設。および「米崎りんご」ねぶたの製作と関連業者への贈呈。さらにカラス撃退など産業課題の調査報告と提案。（12月） 今後の活動に向けての他大学の活動動向調査。（3月）		大学祭および商店街催事で陸前高田市の物産販売。（11月）
2016年度 （12月まで）	今後の活動および産業や商業の課題についての現地調査。（8月） 創作ワークショップ（コップへの絵付け）の実施および「白」ねぶたの修復。主な実施場所：保育園・高齢者福祉施設。（12月）	大学祭にて被災地へのメッセージ収集。（11月）	大学祭での陸前高田市の物産販売。（11月）

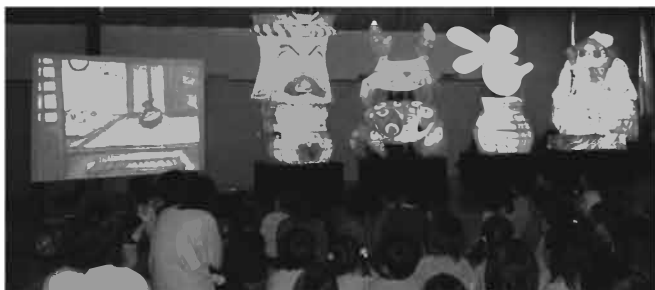


写真1 ねぶた劇「さるかに合戦」(2011年)



写真2 クリスマスツリーねぶた作り(2011年)



写真3 影絵劇(2012年)



写真4 ひみつきち作り(2013年)



写真5 未来のまち(2013年)

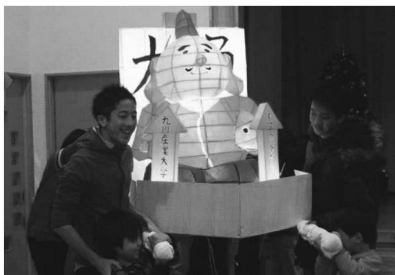


写真6 「山笠恵比寿」ねぶた(2014年)



写真7 博多人形絵付け(2014年)



写真8 「りんご」ねぶた(2015年)

3. 活動のなかで得られたこと

これらの活動によって、われわれは多くのことを得ることができたと感じている。第一に、陸前高田市および市民のみなさんとの交流関係ができたことである。ワークショップなどで多くの言葉を交わし、楽しい時間を共有でき、そこで多くの笑顔を見られたことが、プロジェクトに参加したメンバー全員の人生に彩りを与えてくれた。

第二に、震災について多くのことを知ることができたことである。未曾有の震災を通じて被災者のみなさんが体験されたこと、そのときに考えたことについての話は、いつ同じような災害にあうかもしれない私たちにとって、たいへん貴重なものであった。回数こそ少なかったが、陸前高田市長の戸羽市長や震災語り部の釘子明氏、SAVE TAKATA スタッフ(当時)の伊藤英氏に本学まで来ていただき、被災時のことについてお話をしていただいたことは特に貴重な機会であった。

第三に、活動を通じて多くの学生の成長がみられたことである。他の誰かの苦しみを想像し、その幸せを祈ってチームを組み、準備をする経験を通じて人間性も能力も磨かれていく。厳密な能力変化測定などはしていないが、参加学生から提出される活動後レポートなどを読む限り、彼らが様々な体験を通じて大きく成長したことが伺えた。

4. 今後の展望

6年間の活動を通じて、私たちは実に多くのことを学ばせていただいた。その中で積み上げて来た関係やいただいた知識はまさにわれわれの資産である。このことに感謝すると同時に、われわれが強く認識しておかねばならないことは、この資産の価値は、今後われわれがどのように活動をしていくかによって上がりもずれば下がりもするということである。この資産の価値をさらに上げていくための展望を示してみたい。

まず、陸前高田市の人々との関係を発展させ、永く続けていくためにも、この陸前高田市にある可能性を掘り出し、豊かな価値を創り出していくことが望まれる。昨年度から取り組んでいる大学祭での陸前高田市の物産販売は、福岡という地にそれを持ち込むことでさらにその物産の価値を上げることに挑戦するものである。われわれが陸前高田市を訪問することで、よそ者でしか気づけない「陸前高田市の良さ」を掘り出す機会を提供できるのではないかと考えている。

次に、東北大震災の経験と知識を福岡に持ち込み、しっかりと定着させることである。東日本大震災からの教訓は、福岡市民にとって2016年5月の熊本地震への支援活動や動きを助けてくれたと強く感じるどころである。しかし同時に、避難所運営やステージごとの支援活動の柔軟な変化など、学びが足りなかったと感じることも多くある。

九州は南海トラフ地震のほか、火山活動、豪雨などさまざまな災害リスクに晒されている地域であるだけに、少しでも多くのことを学ぶ機会をいただければと考えている。

さらに、私たちが共に広い視野を持ち、成長していけるように「人生をあゆむ」ことについて幅広く考える時間と機会をつくることである。われわれは活動のために陸前高田市を訪問するたびに一週間程度、滞在してきた。その度に感じる、九州とは異なる、陸前高田市の気候、景色、食事、人々との会話、そして震災の傷跡は、私たちに「人生をあゆむ」ことを考えさせてくれる。そのことを訪問した学生や教職員だけで留めるのではなく、これからのことを考えていこうとする中学・高校生をはじめとした若い年代と共有する機会があれば、大学生にとってもより豊かな思考の機会になると感じている。

そして、これらの展望をより明確で具体的なものとし、着実に実現へと結びつけていくためには、より多くの人々との協働が欠かせない。そのためには、産・官・学・民の結びつきとさらに広げ、交流を一層密にしていくことが必要であると感じている。より多くのプレイヤーが関わるように活動を設計することは、あいまいさや不透明感を高めやすいが、その分、アウトプットの可能性が広がるということでもある。その可能性に期待を膨らませながら、皆がワクワクするような活動を展開できればと考えている。

参考文献

青木・榊・間間・三上 (2013) 「ねぶたによる東日本大震災の被災者支援活動」, 日本デザイン学会研究発表大会概要集, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/60/0/60_105/_pdf 2013年6月20日公開.

著者紹介

間間理: 九州産業大学経営学部教授, 専門領域は経営組織論. 2012年より陸前高田市にて被災者支援などの活動に取り組む.

大学住所: 〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1, E-mail: ki_ki_ma@p.kyusar-u.ac.jp



榊泰輔: 九州産業大学工学部教授, 専門領域は医療福祉ロボット. 2011年より陸前高田市にて被災者支援などの活動に取り組む.

大学住所: 〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1, E-mail: sakaki@p.kyusar-u.ac.jp



青木幹太: 九州産業大学芸術学部教授, 専門領域はプロダクトデザイン. 2011年より陸前高田市にて被災者支援などの活動に取り組む.

大学住所: 〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1, E-mail: k_aoki@p.kyusar-u.ac.jp

